

乳児期の保育における大人のかかわり ～主体性・自我の育ち、楽しさとの出会い

講師

長瀬 美子

大阪大谷大学教授

1. はじめにー0～2歳児の保育とは

乳児期は急いで結果を出す保育ではなく、その時期で何かが完結したりするものでもありません。それどころか、幼児や小学生、思春期や大人になった頃、乳児期の教育や保育の結果が現れることがあります。幼児は、個性が輝く中で友だち関係が豊かになり、葛藤と解決を繰り返して成長していきますが、本日は、その土台となる乳児期について、乳児期の保育における大人のかかわりとして子どもの主体性を育てるかかわり、自我を育てるかかわり、楽しさとの出会っていくかかわりについてお話します。あらゆることがスタートする乳児保育では、子どもがもっとやってみたくなり、自分の力でやることの喜びが生まれるような大人の援助が大切です。発達を学ぶということは、知識を増やすことだけではなく、子どもの育ちを理解して見通しを持った保育を行ったり、保育の中で大切なことに丁寧にかかわったりすることにつながるのではないかと考えています。

(1) 乳児期の重要性

乳児期は、子どもにとって人生のスタートであり重要な時期と考え、日々の保育をしています。改めて乳児期の重要性とは何でしょう。私は、リズムのある規則正しい生活をしっかりと作ること、その毎日の生活の中で、自分でやってみたいと思う主体性や活動性の基礎を作ること、大人の見守りの中で、他者との関係の基礎を作ることだと思います。

まず、規則正しい生活です。大人の生活はすでにリズムが作られています。0, 1, 2歳児は、大人同士が協力し合いリズムのある生活を作っていく必要があります。しかし、全てしてあげるのではなく、子どもが自分の力でやってみたくないと主体的に生活にかかわり、出来たという達成感や自信を感じながら子どもと一緒に作りま

す。私は、養成校の教員ですが、学生は、入学当初、幼児や小学生と比べれば、未熟で出来ないことがたくさんあり、可愛い存在である赤ちゃんをお世話をしてあげたいと思っています。そこで、一番初めの授業では、保育とは、お世話をするのではなく、子どもが自分の力でできるようになることを私たちが手助けすることだと教えます。もちろん、してあげないとできないこともあります。子どもの主体性と活動性として、だんだんと子ども自身が意欲をもち、やり方が分かり、身体の発達も整って来た時、少し手伝ってもらいながらやってみたらできた、そして、またやってみたくらいという気持ちと一緒に作っていくことが大事だと話しています。これは遊びも同じで、準備やきっかけ作りは大人の役割であり、子どもは、先生がおもちゃを用意することで出会うことができます。

(2) 気づく力・読み取る力が求められる

幼児担当の保育者は子どもの思いをしっかりと受け止めながら一緒に考えていく力を持ち、いろいろな思いをもった子どもがさまざまに発信することを否定せずに聞きながら調整していく力が必要ですが、乳児担当の保育者は、子どもの思いに気付く力と読み取る力、そして、それを次につなげていくためのつなぐ力が必要です。

私たちは、乳児が何も言わなくても、思いが読み取れることがあります。誘っても絶対やらないとか、食事場面で口をつぐんで絶対食べない場面で子どもの思いを感じることがあります。この時、言葉で言わなくても思いが生まれています。人間の発達では、思いや意志の方が先に生まれ、それを表わす手段である言葉が少し遅れてゆっくりと育ちます。0歳、1歳、2歳という年齢は、思いが先行し、それを表わす言葉を十分持っていない時期になり、子どもに思いがないわけではあり

ません。ちなみに、子どもたちが自分の思いを自分の言葉でしっかりと伝えられる目安は4歳だと言われていました。4、5歳くらいになると、嫌なことに、「〇〇が嫌」と言えたり、「だって怖いから」「だって恥ずかしいから」と理由が言えるようになります。言葉が豊かに育つということは、語彙が増えるということだけでなく、自分の気持ちを整理して伝えられるようになることであり、このようなことから、子どもは伝わることで気持ちが落ち着いてきます。これまでに、3歳で落ち着かなかった子が自分の言葉で気持ちを言えるようになって、4、5歳で落ち着いてきたと感じたことがあったのではないのでしょうか。思いと言葉の発達にはこれ程ずれがあるのです。

子どもたちは、1歳であつてもたくさん思いを持っていて、言葉では話せない時期をくぐって大きくなっていきます。だからこそ、大人は、子どもの思いに気づき、読み取って、言葉にならない思いを伝えるために代弁をしたり、仲立ちをしたりする役割があるのです。一方で、4歳になると大人が仲立ちし過ぎないようにしてください。子どもが自分で言おうとする時期ですので、先に補うのではなく、本人が言えるような援助が必要です。このように、発達の時期によって大人が行う援助は違います。

そして、1歳児は、大好きな物の取り合いが増え、言葉以外の表現や発信が多くなり、担任の先生は友だちをひっかいたり噛んだりしないように気を付けながらも、子ども自身に自分の意思をしっかりと出させてあげたいと日々葛藤されていると思います。言葉以外の表現はたくさんありますが、乳児担当の保育者は、これらにしっかりと耳を傾けながら、何が嫌で何が悔しかったのか、本当はどうしたかったのか、子どもの思いはどこにあるのかと、子どもの言葉にならない思いに気づき、読み取っていく力が必要です。

私は日本の保育者は読み取る力が強いと思います。それは、子どもの普段の様子をしっかりと見ているからでしょう。子どもを見て、「今日はいつもと違うな。何かあるのかな」「今日は、大好きなことも集中しないな」と、丁寧に把握しているからこそ小さな違いに気づきます。また、乳児

担当の保育者は、家庭とよく連携しています。家庭で読んでいる絵本、就寝時間や食べた物など、保護者に聞いているからこそ子どもの好きな物が分かります。勘ではなく、普段の様子との把握と保護者との連携から得たその子に対するたくさんのお話を積み重ねて判断し、子どもが言葉で言ってくれなくても、「こう言いたいのかな」「こう思っているのかな」と気づき読み取ることができます。乳児保育は、これができないと大人の都合のよい様に保育を行ってしまい、日々の保育は上手く廻るかもしれませんが、乳児にどんな力の基礎をつけるのかと考えた時、子ども自身の思いをしっかりと読み取りながら、尊重し、子どもと一緒に生活を作って楽しい遊びをしていくことが大事になります。

(3)「つなぐ」保育

乳児の子どもたちは、興味がある所に行き、じっと見たり、触ったり、口に入れて確かめようとしたりしますが、その姿を見て、皆さんはどうしますか。

保育者は、子どもが探索を始めた時、子どもの行動から気づき読み取り、そしてつなげていかなければなりません。それは、次々新しいおもちゃを出して与えることではなく、子どもの興味をスタートにして、次はどんな遊びを広げていこうか、次はどんなおもちゃと出わせていこうかと、どのようにつなげるのかを考えることです。保育は、養護と教育が一体的に展開したものであり、その中で、教育は、文字や数字などを教えるイメージがありますが、そうではありません。指針にも書いておいて、教育とは、発達の援助のことを言い、子どもがハイハイをして探索を始め、そこに興味が生まれたら、それをどのように膨らませて広がっていくかです。何かを教え込むことではありません。それをどう豊かに広げ、どう広げれば子どもの楽しいという経験につながるかという、子どもの育ちを援助することが教育をするということなのです。

また、乳児担当の保育者にとって、情緒の安定や生命の保持と言った養護は特に大事です。しっかりと子どもに目を向けて気付くからこそ子ども

もの命が守られ、気持ちが安定します。そして、養護が大事なことはもちろんですが、その養護と共に、子どもたちに生まれ始めたものをどう育てていくのかという育てる視点をもったかかわりが大切です。

しかし、子どもの気持ちとかけ離れたところで何かを教えたり与えるのではなく、まずは子どもの思いや興味がどこにあるのかを考え、それを感じながら一人ひとりに適切なものを用意して一緒に楽しんでいくようにします。

保育をつなぐとは、子どもと子どもをつなぐことです。喧嘩した時にはお互いの話を聞いて、二人をつなげるようにしていると思います。

環境として、人形は保育室に置いておくだけではなく、子ども自身が人形に興味を持ち、可愛がってあげたいと感情が生まれてこそ抱っこして遊び始めます。保育者自身が人形を可愛がる姿を見せることで、子どもたちは人形が物であったところから、自分にとって興味を持ちかかわりたい対象となって遊びが始まります。

まだ寝ているだけの子どもは、自分でおもちゃを持ってくることはできませんので、子どもに楽しい遊びの世界があることは大人が働きかけて知らせます。これらのように環境と子どもをつなぐことは乳児保育では大切ですし、保育者が果たしている大事な役割です。子どもの発達を考えながら、どんなおもちゃがこの子どもにとって大事なのか、何と出合わせていくのかと考えて子どもたちに楽しい出会いを作ることが大切です。

2. 保育におけるかかわり（1）－主体性が育つ生活づくり

（1）乳児の意思を尊重した生活づくり

いろいろなことがスタートする乳児期に、保育では何が大切なのでしょう。

まず、全ての土台である生活が大事です。安全・健康で衛生的であることはもちろんですが、乳児も意思を持つ主体であると考え、尊重しながら、子どもが自分からやってみようという気持ちが湧き、できたよという達成感や喜びのある主体性が育つ生活づくりが大事です。保育をしていると、0歳の赤ちゃんがオムツ交換で自らお尻を上

げようとする場合があります。赤ちゃんは、あれほど受身な存在ですが、9、10ヶ月頃には、上手くできないながらも大好きな先生がすることにかかわっていこうとする意思が現れます。また、毎日の生活の中で、まだ自分で物を使えなくても、スプーンを頂戴と手を伸ばし、魅力的な道具を自分も使ってみたいという思いが生まれています。

このように、乳児の時期から子どもは意思を持つ主体であり、それを尊重することで主体性が育ちます。しかし、この時期、意思や意欲があってもそれを表わす手段がありません。だからこそ、保育者は、子どもがまだ小さいから何も分からず、何も思っていないと決めてしまうのではなく、その意思を読み取り、どうしたいと思いを願っているのかを考え、乳児にとってどのような生活を作ることが子どもの思いに添った生活になるかを考えながら保育をすることが必要です。

（2）生活習慣の確立に向けて

子どもにとって乳児期は生活リズムを作る大事な時期ですので、一人ひとりの生活習慣の確立は常に乳児保育の根本に置かなければいけません。子どもの思いを叶えるためにと、生活リズムが乱れたり、また、リズムを崩してまで大人の思うように保育するのではなく、子どもに毎日の安定した生活を保障しながらリズムがある生活とつなげ、その中で時間がかかっても自分の力でできる経験をさせることから、子どもの自信や周りへの興味につなげるようにします。

（3）自分からしようと思えるような「その気になれる」環境づくり

子どもの主体性が目に見えて発揮されるのは、幼児や小学生になってからかもしれませんが、それは、急に子どもが主体的になるわけではなく、乳児期に、やってみようことを自分の力ですることが叶う生活があることが主体性を育てます。例えば、子どもが、毎日の生活の中で洋服のボタンを自分で留めるなど衣食住を自分でするというのもそうですが、今日から幼児だから、小学生だから頑張ってしまうということではなく、自分の力で日常の些細なことができたと思う積

み重ねが主体性や活動性の基礎となり、生活習慣の確立にもつながります。私たちは、子ども自身がその気になれる環境作りを行い、子どもが自分でやってみようと思える生活を作ることが主体性を育てる上でとても大切になります。

また、保育において言葉かけは重要です。しかし、何事も言葉をかけないとできない子どもを育てたいのではなく、子どもが自分で気づき分かって行動できることが重要です。大人は、できない子どもに言葉かけをして援助することもありますし、言葉かけが必要ないのではありません。私たちは、乳児の主体性を育てるために、子どもが自分でできる環境かを見直し、子ども自身が気づき行動できる環境を作ります。子どもはどうか分かりますが自信をもって取り組みます。子どもの気持ちが散漫になる環境ではなく、今からしようとするその先に何をすることが分かります、やろうとしたことがしっかりと注目できる環境なのか、そして、子どもの気持ちがスムーズにそのことに向いて集中できる環境なのかを見直して欲しいと思います。例えば、食事の時、食べている子どもは、食べ終えて遊んでいる子が見えると気持ちが向かなくなります。食べる事に積極性がない子どもは特に遊びが気になり、食べることが疎かになります。その時、「そっちを向いてはダメよ」と声をかけるのではなく、食べている子どもの椅子の向きを変えたり、仕切りをして気が散りにくい環境を作り不必要な注意や叱責をしなくても子どもが自分で気持ちを向けることができるようにします。

また、乳児期は、生活や行為の流れが大事です。1歳頃は、現在と一つ先の見通しがつく年齢ですので、例えば、子どもに「おててを洗って、ご飯食べようね」とか、「お靴を履いてお外に出ようね」と言って、今と次をつないだ言葉かけをしています。子どもは、着替えた後に脱いだ服をどこに片付けるのか分からなかったり、おもちゃをどこに片付けるのか分からず、結局、それを放り投げたり、違うことに興味を向いて遊んでしまします。しかし、片付ける場所が分かると片付けられ、それは、今と少し先がつながり、思ったことが自分の力で叶う経験につながります。子どもが、ど

うすればいいのかが分からず遊んでしまい注意される生活と、次にどうすればいいのかが分かり、上手にできたねと承認され、また次もやってみようと思える生活が毎日繰り返されることとの違いは明らかです。乳児保育では、子どもに分かりやすい生活を作り、自分からやってみようという気持ちになれる環境を整えます。それが幼児になると、少しだけ分かり難しさがあることが必要になります。皆で相談したり、ルールを決めたりして、最終的には、子どもたちが「ここが不便だから、こうしよう」「こうしなければいけない」などと気づくことが大事です。乳児は、やってみたいと思う意欲や興味、主体性の最初のところを大事にする時期だからこそ、わかりやすい生活の中でやってみようという気持ちが湧き、自分の力でやりとげ、できたよと喜び、またやってみたいと思える次の意欲につながるような分かりやすい環境作りが大事です。子どもが、いつも同じ場所でどうしたらいいのかと先生の顔を見るのであれば、それは、子どもの視線や動線と合っておらず、次にどうすればいいかが分かりにくく戸惑いや不安が高い場所になっているかもしれません。また、外遊びからお部屋に入る時、ご飯から着替え・排泄を済ませて午睡をするなど、子どもに一つ一つ声をかけないとできないことが、同じ時間や場所で繰り返されているとしたら、子どもは、行動の見通しがつきにくいのかかもしれません。「これが分かりにくかったのか」「次にしようという気持ちが湧くためにはどうすればよいか」と環境を見直すことで修正できます。保育者には意味があるとしても、子どもは、この先が分からなければ待ちにくく、楽しいことがあると分かれば待つことができます。子どもに待っている意味を分かりやすくすることが、子どもが自分でしようということにつながります。

4月から考えると、子どもたちは大きくなり、歩行したり走れるようにもなりました。また、好きな遊びも変わってきましたので皆さんの中には、そろそろクラスの保育環境を変えた方もいるのではないのでしょうか。いつもの見慣れた保育室ですが、子どもの身体が大きくなり、自分でできることが増えてきたこの時期に保育室を振り返

り、子どもたちの目線や動線にあわない場所、子どもの気持ちが崩れる時間などの見直しをしてください。大人が言葉をかけてさせるのではなく、子どもが自分から気づいてできるような環境づくりを大切にすることで、子どもたちは自ら興味を持ち、意欲をもって取り組むようになります。もちろん、言葉かけをすることを全て否定するのではなく、初めてのことには子どもに言葉をかけながら、子どもが自ら気づくような環境を整え、子どもが取り組んできたことへ共感の言葉をかけて下さい。指示や助言が多い保育室ではなく、できた時の共感の声がたくさんある保育室であれば、子どもは、先生は自分のことを見てくれていた、できたことを一緒に喜んでくれたと感じ、それは大人との信頼関係につながります。

(4) 安心できる他者の見守りの中で

子どもは、安心できる他者が見守ってくれているからこそやってみようとしています。新しいことにも苦手なことにも、保育者の姿が見えたり、友だちが頑張っている姿が見ることができて、他者が感じられる生活の中で挑戦し、やってみたいと思うことが叶うことが乳児の生活において大切です。乳児だからこそ、こちらがしてあげることばかりでなく、本人の意思を尊重しながら、自分の力で取り組める時間や場面を作っていくようにします。

子どもには、興味をもったことは何でもさせてあげたくなります。スプーンやお箸を持たせるのもいつ頃が良いか悩みますが、子どもが興味をもつことは一つの目安であり、やってみたいという意思が生まれることは非常に大切です。しかし、子どもが適した時期にそれに出合えることが一番です。そこで、私たちが適した時期を見極めるには、子どもの心と身体の両面からみていくことが必要です。私は、これを「心のスタンバイ」と「身体のスランバイ」と呼んでいます。両方が揃った時がその子の適した時期です。「心のスタンバイ」は、そのことに興味が湧き、やってみたいという意味が生まれた時です。乳児なので、やってみたくて言葉で言いませんが、保育者がしている時にじっと見たり、貸して欲しがって手を伸ば

したりと、言語以外のいろいろな方法で自分の意思を表します。そして、「身体のスランバイ」はそれを実行できる身体なのかです。食事のとき、子どもがスプーンに興味があれば持たせてあげたいですが、握れないのに持って食べるとこぼしてしまい、その子にとって食べる事が楽しくありません。子どものやりたい気持ちを待たせてしまうと思うかもしれませんが、それを叶える手や指、身体の状態になっているかをしっかり見極めることが重要です。スプーンで食べたいと「心のスタンバイ」が整っていても、手、指が追いついていなければ、しっかり手を使った遊びを取り入れ、手指や身体を育てながらその時期と一緒に待つことが大切です。

逆に、しっかりスプーンを持てる身体の状態の子どもが、少しも食事でスプーンに興味をもていなければ、友達が食べている様子を見せたり、遊びの中でスプーンを使った遊びをするなど興味をもたせるかかわりや促しが必要です。

子どもが、興味をもったことをきっかけに、それが思ったことができる身体になっているかを見ながら、子ども一人ひとりがそのいろいろなことにより出合い方ができて、思ったことを自分の力で叶える経験をすることが主体性につながっていくのです。

3. 保育におけるかかわり(2) - 思いを受けとめ、自我を豊かに育てる

(1) 自我の芽生え「自己主張期」

保育者は、子どもの自我の芽生えをどう豊かにしていくかを考えていくことが重要です。また、保護者にとってはこれは悩みのたねでもあります。保育における大人のかかわりは、子ども一人ひとりの思いをしっかりと受け止めながら、自我を豊かに育てていくかかわりが求められていますし、保育者がしっかりと理解し保護者と共有していくことが大切です。

0歳後半からイヤイヤが始まり、1、2歳はその渦中です。そしてイヤイヤだけでなく子ども同士の衝突、ひっかきや噛みつきにつながり、保育では、とても気を使うデリケートな時期です。その時期にその姿がない方が良いのではなく、芽生

え始めた子ども自身の意思を大切にしたい保育をする必要があります。この時期は、自分でしたいという気持ちが高まりますが、まだまだ表現が未熟で、「自分で」とか「嫌だ」などの自己主張として表れ始めます。この未熟で芽生え始めた自我を尊重し大切に育て、見通しを持ってかかわってくれる大人の存在が欠かせません。保育者の必要な力は気づき読み取ることですが、食事を食べさせようとしたら嫌と言って食べない時、子どもはいったい何が嫌で、どうしたいという意思が生まれているのかを考えてみるのが大切です。例えば、先生から食べさせてもらうのが嫌なのか、食べたいものと違うものを口に運ばれたから嫌なのかと考えます。嫌の言葉は自我の芽生えの一つの手がかりですが、言っているから自我が見られて安心なのではなく、この言葉にどのような思いが生まれているのかを読み取り、感じていく私たちの力が必要です。子どもは、「こうしたい」という思いを正確には伝えてくれないので、ああかな、こうかなと聞きながら分かっていきます。私たちは、嫌という言葉の裏側にある子どもの思いを受け止めながら、自我を豊かに育てなければいけません。この時期の子どもは「嫌だ」、「自分で」としか言いませんが、その言葉の奥に思いや願いを読み取り、それを叶えていくことが重要です。

しかし、0、1、2歳児が意思や願いを持つことは良いことですが、それがすべて叶うわけではありません。私たちは、子どもに、もの分かり良くすぐに気持ちを切り替えられるように育てて欲しいのではなく、子どもたちは自分でしたい思いを叶えながら大きくなり、一方では、それが叶わないということも経験するのです。保育者は、子どもの「嫌だ」の中に意思を読み取り、その思いを受け止め、しようとすることにしっかりと寄り添うことが大切です。子どもたちは、叶わないことに出会うと悔しくて悲しい経験をしますが、私たちは、子どもが思いを収めることを学んでいると理解し、その思いに共感することが大切です。子どもは「今度やろうね」「出来ないことは先生が手伝うね」と受け止められ、気持ちの折り合いを付け、切り替えていくことにつながると思います。

子どもは、幼児になってからではなく、思いが生まれたこの乳児期に、出来て嬉しかったことを一緒に喜んでもらい、できなかったことや悔しかったことを大好きな人がちゃんと分かってくれ、分かってくれたから気持ちが切り替わる経験をすることが大切です。

（２）他者とのかかわりの中で自我が育つ

自我は、自分ひとりのものというイメージがありますが、自我は、一人ひとりの自我を大事にしてくれる大人がいて、対等な誰かとぶつかり合いながら他者とのかかわりの中で育ちます。

保護者なら、子どもがなるべく喧嘩をせずに、相手と衝突しそうななら止めるでしょう。しかし、怪我をさせていいということではありませんが、保育者は、子どもの自我が育つ時、子どもが思いを出し合って衝突を乗り越えていくことを意識して保育を進めることが必要です。他者とのかかわりの中で自我が育ちますが、まずは保育者自身が、子ども一人ひとりがしっかりと思いを出せる相手となれるよう、思いを聞いて大切にします。子どもが、できなくて悔しくて怒ったり泣いたりした時、「泣いてはダメ」ではなく、「自分でしたかったよね、悔しかったね」と受け止めることが大切です。逆に、子どもは否定されることが続くと、自分の思いを出してはいけないと思ってしまう。嬉しかった時、悔しかったり悲しかった時、その感情が他者と共有されることがとても大事です。私は、子どもが小さい時、小児科医に叱られました。我が子のインフルエンザの検査で、恐怖を和らげようと、「痛くないからね」と声をかけたら、小児科医からは、「これは痛いです。痛くないというのではなく、痛いけど頑張っただけでね」と教えてくださいと教えられ納得しました。「痛くない」と言われると、子どもは、自分の感じた痛いという感情は良くなかったと思うでしょう。自分は痛いと思っても痛いと言ひ辛くなります。「痛いのになんかがんばったね」と子どもの感情を否定せず、受け止めていくことが大事だと教えてもらいました。子どもは自分の感情が否定されず、受け止めてもらえるということが、自分を出しても良く、自分の感じたことは良いことだと

大人の言葉かけをとおして分かります。

1歳児はつもとつものぶつかり合いや物の取り合いなどがよく起こります。一人ひとりに意思や思いが芽生えていて、家庭なら、かかわることが簡単ですが、集団保育では、あちこちでそれぞれに思いが生まれる中、その思いが衝突することがあります。魅力的な一つのおもちゃを同時に二人の子どもが欲しいかもしれません。乳児の衝突では、どちらかが、一方的に悪いということは少なく、両方にそれぞれの思いがあり、その思いが伝え合えないから衝突が起こります。正誤ではなく、思いのすれ違いから起こることだと言えます。

例えば、園庭に出るとき、高月齢のAちゃんは靴が履け、周りを見回すと、低月齢のBちゃんがまだでした。AちゃんはBちゃんが困っているなと気づき、助けに行き履くのを手伝ってあげましたが、その時、Bちゃんに押されて引っ張り返り、靴を投げられました。その時、Aちゃんは自分が履き終えて、Bちゃんを手伝ってあげようとする思いが生まれました。Bちゃんが自分で履きたかったという思いがあったことも大事です。Aちゃんの困っている友だちを助けたいたいという気持ちも、BちゃんのAちゃんを押してしまったことはそのまま良いことではありませんが、自分で履きたいという思いも大事な育ちですが、お互い通じ合いません。こんなことは1歳児では絶対にありませんが、Aちゃんが「手伝おうか」と言うと、Bちゃんが「大丈夫だよ、自分でするから」と言えたら、この衝突は起こりません。思いはどちらも正しいのですが、通じ合う手段がないから思いがすれ違います。この衝突を子どもの悔しい悲しい思いだけで終わらせるのではなく、大人が仲立ちをしながら、「AちゃんはBちゃんが困っていると思って履かせてあげようとしたんだね、優しいね」「Bちゃんは自分で履きたかったみたいだよ」と思いを言葉で伝えます。大人が代わりに言葉にして伝えることで、まずは、自分の思いが大好きな先生に分かってもらえたという気持ちや、自分の思いは誰かに分かってもらえるという安心感をもちます。そして、私に思いがあるのと同じように、人には人の思いがあるということ

も学びます。まだ、1、2歳の子どもですから、思いやりの気持ちや相手の立場に立って考えることはできませんが、私とは違う思いがあることを知っていくことは、相手の気持ちを考えられるように育っていくための第一歩です。一人ひとりに思いが生まれた今こそ、子どもは、自分とは違う思いがあることを知るための大事なスタートラインにいるのです。

(3) 思いが出せる、受容・共感される

私たちが子どもに丁寧にかかわることで、私には私の思いがあり、しかし、人にも思いがあるということ子どもは自分の思いが生まれたタイミングから学びます。大人にしかできない役割をしっかりと果たすことで、幼児クラスになれば、子どもは一人ひとり違ってもみんな頑張っているとか、違った意見もそうだなと思ったりするでしょう。また、配慮の必要な子どもがいるクラスで、皆と同じことはできなくても、頑張っているなど違いを認めるクラスになっていくでしょう。まずは、私と私の思いがあるけれど、私と違う思いを持つ友だちがいるということ、そして、違うということがマイナスや排除の対象と考えるのではなく、それを認め合っていくようになるには、乳児期の一人ひとりの思いが生まれたタイミングでの大人のかかわりにあると言えます。子どもたちは、衝突のたびに丁寧に話してもらうことで、受け止められ、人の思いに気がつきます。自我は、人をくぐりながら、私の思いはここにある、私はこうしたいということに気づきます。むやみに衝突させる必要はありませんが、子どもの思いと思いが衝突した時、しっかりとそれぞれの思いを受け止めながら、相手の思いを伝えていくことが大事で、それは大人にしかできない役割です。子どもが自分の思いを受け止められ、そして、相手にも思いがあることを知るスタートが乳児保育です。言い聞かせて教え込む必要はありません。このようなことを繰り返しながら、私の思いと人の思いがあることに気づいていくのです。

低年齢から分かせようというのではなく、そこからスタートを切るという思いで、乳児保育では、丁寧にかかわりながら、違うことがおもしろ

いと思えることや、私には私の考えがあり、友だちには友だちの考えがあることを、子ども自身が受け止められ、人の気持ちも伝えられることを通して人とのかかわりの土台が作られるのです。

4. 保育におけるかかわり(3) - 「楽しさ」との出会いをつくる

(1) 遊ぶ楽しさが感じられる＝五感で「感じる」経験

乳児期は、楽しいことと出合っていくことが大事です。楽しい遊びが自分の周りであることを知る時期ですが、子どもは自分で知ることができないので、大人がきっかけを作って身体と表情でそれが楽しいことを伝えます。0歳児は、少しずつまとまって眠れるようになると、起きている時間もまとまります。その時間に、大好きな先生と一緒にいたり、生活として美味しいご飯があったり、排泄や着替えをしてすっきり快適になります。もう一つは、好きな遊びがあることで、子どもにとって、それが楽しく充実した時間になるかはとても大事です。身体や心、人との関係、知的な発達も遊びから生まれ、乳児は、遊びから楽しいということと出会い、発達が始まります。だからこそ、子どもにこんなことが出来るようにしようとするのではなく、まずは遊ぶ楽しさが身体でしっかり感じられるよう、それぞれの子どもたちの発達や体勢にあわせた遊びを提供することが大事です。

例として、泥んこ・砂遊びでは、お座りできる子どもから、砂場で砂を触って遊ぶことができます。雨上がり、晴れの日それぞれの感覚を楽しむことから始め、だんだんと、何かを作ることに繋がっていきます。そして、幼児は、それを取って置いたり飾ったりした後、例えば、泥んこで遊んだ水を容器に入れて「先生飲んで」と持って来ます。泥というシンプルな素材だからこそ、いろいろな楽しみ方ができます。このように、この時期には、感触や感覚を楽しむ遊びをした後、何かを創り出す遊び、そして、それが誰かとやり取りする遊びにつながります。

また、子どもは、歩いたり、走ったりできるようになれば身体を動かす遊びがしたくなり、でき

ることに挑戦しながら心と身体を開放します。私たちは、まずは子どもにその遊びによってどんな発達もたらされるのかを見通し、乳児期は、その中で、生活面でも遊びでも大人と一緒に取り組みながら子どもがやってみたい気持ちを大切に、できたという経験から楽しいということを知る時期です。

(2) 「やってみよう」気持ちを大切に

幼児は、始めから少し先の見通しや目的を持って遊びますが、乳児は、始めからあれがしたいと思いつつ取り組むことはありません。意思がないということではなく、遊びに関しては、こうしようと思って遊ぶことばかりではなく、やっているうちに楽しさが感じられることがたくさんあります。初めは感触が楽しくて泥んこ遊びを楽しんでいた子どもたちが、触っているうちに偶然お団子のようなものができ、粘土遊びでは、細長いへびの様なものができることがあります。最初から、お団子やへびを作ろうと思って取り組んではいませんが、子どもは、遊んでいるうちに結果としてできた丸いものや細長いものをみて、そのように思うのです。1歳頃の子どもの見立ては、初めからイメージがあるわけではなく、できたものを見てイメージが湧き、偶然できたものが、子どもたちの楽しさになることが多いのです。ですので、保育者が、偶発的なものを遊びの楽しさにどうつなげ、見立てにつなげるのかが重要です。子どもには、たまたまできたお団子やへびですが、楽しかった経験から次の機会には「またお団子やへびが作りたい」と前回よりは少し意思をもった活動になります。初めから、意思や見通しのある活動ではなく、大人が楽しい活動に出合わせ、そこから一緒に喜んだり楽しんだ結果、子どもは、また次にこんなことをしてみたいと思うようになります。

(3) 発達にあった魅力的な対象

保育者が、子どもに興味があるもので発達にあつた対象をしっかりと選べるのが重要で、特に0歳児は、私たちがどう楽しみを作ってあげるのかが大切です。まだ仰向けで寝ている子どもの目の

前に保育者が楽しいものを持ち込んでくれない限り、子どもはおもちゃに出合えません。寝転んでいる子どもは、手が開いているので、目の前にぶら下がるおもちゃがあれば、手を伸ばして音を鳴らして楽しむことができますが、これを吊るしておくだけでなく、保育者が手で触って鳴らすことで、子どもは、音がすることや手を伸ばして触れることが分かります。子どもが、寝ていたり、座っていてそこから動けないから何もできないのではなく、手が使えることでじっくり楽しめることは何か、ハイハイした時に目で対象を追って動きがある中で楽しめるものは何かと考え、まずは子どもがどのような動きを獲得している途中なのかを理解すると、たくさんの楽しみと出会わせることができるでしょう。このように、子どもの出来るようになったことや、周囲への関心を見極めていくことで発達にあった魅力ある遊びが提供できるのです。

子どもの遊びの環境は、できるだけ意欲や興味を持って遊び始めてから、それを制止しなくても良い状態にしてから遊ぶといいでしょう。もちろん、何でも触っていいわけではなく、また、どこに行ってもいいわけではないのですが、せっかく、子どもが興味をもって動き出したとき、それを制止してしまうと意欲が中断されることになります。最初に子どもたちが遊びを始める時、不必要なものは片付け、どこに行っても危険がないようにし、遊びの禁止や制止をできるだけせずに子どもが思いきって遊ぶことが許される環境を作って、十分に楽しいことをしていきます。

子どもたちにとっての楽しさとして、最近、私は、子どもは、遊びが出来てからが楽しいのだと思っています。

幼児の例になりますが、子どもは、竹馬に乗りたいという気持ちは十分持っていたりも乗れるまでは楽しくありません。しかし、乗れた後、そこからもっと高く上げたい、競争したい、サッカーをしようなどと竹馬が自分のものになったとき、楽しさが始まるように思います。大人は乗れたことがゴールと思い、乗れるまでのプロセスが大事だと考えます。もちろん過程も素晴らしい発達ですが、子どもは、その後、自分のものにしてから

楽しさが始まるのではないかと思います。また、こまも同様です。回せるまでは必死ですが、出来るようになれば、友だちと競争したり、手の上で回すなど様々な楽しさが広がります。そして、子どもは、同じ絵本を何度でも読んで欲しがります。それも新しい絵本ではなくよく知っている絵本を繰り返し読んで欲しがり、展開が分かって「やっぱりね」と思うことに楽しみが広がるのが乳幼児期の特徴です。

私たちは、魅力的で子どもの発達にあった遊びを保障しますが、それが、できて終わりではなく、子どもはそこから楽しむようになるので、保育においては、子どもができた後に余裕を持ち、もっとやってみたい気持ちや楽しさが味わえるよう余地のある遊びの設定をしてください。形式的にあと3回しましょうという、すぐに次に向かうような保育ではなく、出来たところを何度も繰り返して遊ぶことが許されるような保育の設定をして下さい。遊びは、できたからこそ、そこから繰り返しやってみたくなるのであって、飽きるからと次から次へと変えてしまわず、出来るようになったことを、思う存分繰り返し楽しめるような保育をすることが大事です。次々と新しいことをしていくことだけが、挑戦していくことにつながるのではなく、できたところからそれを楽しみ、しっかり遊んでから満足して次に進んでいくということが、大切なのではないかと考えています。

(4) 楽しんでいる姿を見せる

保育者は、子どもに楽しんでいる姿を見せ、向かいあってしっかり共感しながら遊ぶことが大事です。

乳児期の保育は、大人が子どもをどう上手く遊ばせるかではなく、保育者への信頼をどう遊びの楽しさにつなげていくかということが大事です。

例えば、大人は、人形がどう楽しいかを知っていますが、子どもは人形と初めて出会い、それが楽しいものなのか、危なくないものかはわかりません。しかし、大好きな先生が、ニコニコして人形を可愛がっているのをみると、楽しいものに違いないと間接的に知るので。このように保育者に対する信頼を遊びへの興味につなげていくこ

とが大切です。「楽しいからこれで遊びなさい」ではなく、大人が遊んでいる楽しそうな姿を子どもに間接的に見せながら、しっかりと向かいあい、共感しながら楽しむということが乳児期には大事です。この先の発達として、子ども同士が遊べることや集中して遊べるがありますが、子どもは物とだけ向き合っているわけではなく、大人の姿や大好きな先生が楽しんでいる姿を見ることで、これは楽しいのかな、やってみようかなと思うのです。

保育者への信頼を対象への興味につなげ、それを一緒に楽しみ、共感しながら子どもたちに楽しい世界を伝えていくのが保育者の役割で、子どもたちを楽しい遊びの世界へ導く案内人である必要があります。例えば、スマートフォンで調べたりゲームをしたりする子どももいますが、私たちが、もっと子どもたちの周りの楽しいことにもっと出合わせ、子どもが夢中になって遊ぶ経験をすることからさまざまな発達が促されるのです。

（５）「大人と向かい合って、共感しながら遊ぶ」ことから、「子ども同士が共感し合える経験へ」

保育者が子どもに楽しい姿をしっかりと見せて、思いに共感し、一緒に楽しい世界を経験することで、子どもたちは、遊ぶことが楽しいと感じるようになります。その中で、工夫や我慢をすること、ルールを守ること、負けても気持ちを切り替えることができるようになっていくことが、幼児期の気持ちのコントロールや友だちとの協力につながります。

生活面でも述べたように、楽しいこととの出会いの中で主体性や活動性がたくさん作られるそんな乳児期であって欲しいと思っています。

今日は、主体性と自我と楽しさとの出会いということ、乳児期の保育のキーワードにしてお話ししました。これらは、幼児期や小学校以降の長い人生の基礎として大切なことだと思っています。主体性も自我の育ちも楽しいこととの出会いも、一度の経験からできることではありません。毎日の生活で、自分のできることを自分でしていく喜びを感じられることや、短い時間でも楽しいと思う遊びが経験できるような日々の積み重ねが乳

児保育の特徴です。長い目で主体性と自我の育ちと楽しさとの出会いを大切にして、子どもたち一人ひとりの思いをしっかりと読み取ります。そして、読み取ったものをさらに楽しい事ややってみたいことにつなげます。保育者には、子どもの気づきを見取って次につなげることを大事にししながら、大切な乳児期を丁寧に見守りつつ、たくさん子どもたちの豊かな経験を引き出していただければと思います。

明日からの保育の中で、子ども一人ひとりの思いや自分でしようとする気持ちが生まれる保育室になっているか、子どもたちにその時期の楽しさと出合わせているか、友達とかかわりながら一人ひとりの自我が豊かに育っているかを、子どもたちの姿を見る目安にしていただけたらと思います。

共同機構研修会第5回 平成29年10月19日 於：京都市子育て支援総合センターこどもみらい館
--